

福岡県の主な農産物の生産状況

令和3年2月15日現在
(専技情報より抜粋)

◇麦類◇

11月中旬播きの生育は、1月中旬から高温に経過したため、平年と比べて7日程度早く、茎立ち期は2月4半旬の予想です。1月中旬に麦踏みや土入れ、追肥作業が進みましたが、1月下旬の断続的な降雨により作業が一時停滞しています。雑草の発生量はやや多いです。

排水溝さらえや排水口の整備等を徹底し、表面排水を促しましょう。茎立ち期前までに踏圧・土入れを実施し、生育を確保しましょう。2回目の追肥(穂肥)は、食料用大麦と裸麦は2月下旬、小麦は2月下旬～3月上旬に基準量を施用しましょう。今後、タデ類やカラスノエンドウなどの広葉雑草の発生が予想されるため、早めに対策を実施しましょう。

◇施設キュウリ◇

促成作型は、1月に樹勢が低下し、着果が少なく、出荷量は減少しました。現在、樹勢は回復し、着果が多く、出荷量は増加傾向にあります。病虫害は、べと病が微発生程度です。半促成作型は、2月上旬で約80%の定植が終了しました。1月上旬定植は生育順調で2月中旬から出荷を開始し、2月末から出荷量が増加する見込みです。抑制作型で黄化病等の発生したほ場では、定植時および活着以降、スリップス類、コナジラミ類対策の徹底を呼びかけています。

ハウス内温度の確保、こまめな摘葉や摘心、十分なかん水等により草勢維持に努めましょう。3月から天敵導入予定のほ場は放飼前の準備を行いましょ。温湿度管理によりべと病、灰色かび病害対策を行いましょ。

◇冬春ナス◇

生育は順調で、着果(花)数は増加傾向です。出荷量も増加しています。着果数の増加に伴い、着果負担が大きくなっているため、樹勢低下が懸念されます。病害は、灰色かび病、すすかび病、茎えそ細菌病が一部で発生していますが、例年に比べ全体的に少ないです。害虫は、天敵を導入していないほ場でコナジラミが増加傾向にあります。一部でチャノホコリダニが散見されます。

「PC筑陽」は、収穫の山谷があり、着果負担が大きくなると樹勢が低下しやすいです。そのため早めの追肥や果実を短めで収穫し、草勢の維持に努めましょう。換気、湿度管理等による病害対策、および適期の病虫害対策を徹底しましょう。

◇カキ◇

冷蔵「富有」の出荷は、1月下旬でほぼ終了しました。梅雨期間の長期化による果実肥大の停滞が影響し、平年より出荷量は少ないです。また、昨年多かった軟果の発生は少ないです。

粗皮剥ぎを実施し、カイガラムシや枝幹害虫の密度低減を図りましょ。せん定は、「早秋」等で発生が多かった炭疽病の罹病枝切除を徹底しましょ。

◇トルコギキョウ◇

1月の出荷量は、作付面積の減少や12月の冷え込みにより平年および前年よりも1～2割少ないです。また、販売単価も緊急事態宣言の発出により低下しています。

春出荷(3～5月)作型の生育は、暖冬だった昨年よりも遅れていますが、平年並みであり、本格的な出荷は3月下旬からの見込みです。

春出荷(3～5月)作型では、適時、整枝と摘蕾作業を継続し、ブラスチング対策を徹底

しましょう。灌水量は最小限とし、急性萎凋症を防止すると同時に、ハウス内の湿度を低下させ、斑点病、灰色かび病の対策を徹底しましょう。

◇畜産◇

1月の肉牛枝肉単価は、和牛去勢(A4)で前年比109%、過去5年平均比と同水準となりました。コロナ関連対策事業、海外輸出、ふるさと納税等により需要が増加しましたが、緊急事態宣言の発出により、直近は下落傾向です。省令価格は、前年比及び過去5年平均比ともやや高い水準です。

厳寒期のため、子牛の防寒対策を徹底しましょう。依然として、高病原性鳥インフルエンザ等家畜伝染病が続発しているため、飼養衛生管理基準の遵守に努めましょう。